



浄土真宗西福寺別院 熟柿庵
令和七年六月 第四百十号

梅雨入りを前に、肌寒かったり暑かったりと、落ち着かない天候が続いております。年取ると気候の変化がとても気になります。みな様、いかがお過ごしでしょうか。

先日、四十年來のギリシアの友人アタナシオスから数年ぶりに便りが届きました。私より白髪になった彼も、おそらく七十歳を越えているのでしょうか。今は退職して、アテネの市民大学でボランティアで講師をしているとのこと。

以前は航空便でやり取りしていたのですが、今はメールになり、こちらから返信したメールが翌日には彼から返信がきて、返事するのに時間がかかり、少しストレスを感じています。

『ミリンダ王の問い』

彼は、もともと仏教に関心が深かったのですが、先日、大学で「ミリンダ王の問い」というテキストを学生と一緒に読んだというメールが届きました。学生と一緒に、とても驚きそして感動したとのことでした。

この本は紀元前一世紀ごろ、現在のパキスタン北方にあったバクトリア王国のミリンダ王が、インドのナーガセーナという僧侶に会って、仏教について語りあったという内容の経典です。具体的には大乘仏教の「空」について語られています。

バクトリアという国は、アレキサンダー大王が東方遠征をした時に作った、ギリシア人の住む国です。紀元前、そのギリシア人のミリンダ王が、ナーガセーナという僧侶から仏教を学び、そして最後には仏教に帰依したという話で、アタナシオスをととても驚かせたようです。

けいじようがく

ギリシアには、古代のプラトンの時代から形而上学、つまり現実を越えた真実の世界が存在するという哲学の伝統があります。アタナシオスもおそらくその伝統を受け継いでいるのかもしれませんが。その彼の精神が、この仏教の形而上学と出会って、再びスパークしたようです。

このメールを読みながら、私は少しうれしくなりました。はるか遠くのアテネに住む彼との距離が、より一層近くなったように感じています。

NHKテレビ『人体Ⅲ』

いったい私の体の中はどうなっているのだろう、そんな疑問がずっとありました。たとえば、食べ物も呼吸の息も、口や鼻からのどを通って入りますが、それが途中で二股に分かれ、息は気管支から肺のほうへ、食べ物は食道から胃のほうへ運ばれていきます。しかし、いったい誰がどのように判断し、分けられて運ばれていくのでしょうか。少なくとも私がいちいち判断しているわけではありません。(最近その判断が間違つて食べ物気管支に入り、むせ返り、大変な目にあうことが多くなっています)。

その素朴な疑問に答えようとして作られたのが、この番組です。副題はズバリ「命とはなにか」です。司会はiPS細胞を発見した山中教授とタモリさんです。二人の会話はとてもユーモアがあつて、難しい内容もわかりやすく進行してくれます。

まず、人間は四十兆個もの細胞でできています。といきなり言われても想像できない数ですが、それらが全部情報交換しあつていて私の命が出来上がっています。そしてまた、大半の細胞が数か月以内に壊され、また新しい細胞が作りだされてくる。つまり体内では、命の元である細胞の生き死にが、毎日繰り返されています。そのたくさんある細胞の中の一つ一つがどんなふうになっているのか、それが今回の番組のテーマです。

その一つの細胞の中の構造が、CGで画面いっぱいに映し出されていました。それは言葉では表現できないほどに複雑で、まるでコンピュータの回路を見ているようでした。

そしてその回路の中を、様々な物質が、私の命を生かすために走り回っています。最近わかったことらしいのですが、一つ一つの細胞の中にある物質を動かしている物質が見つかったそうで、「キネシン」と言うのですが、まるで人間の二足歩行のように、二本の足でペタペタと歩きながら物質を運んでいます。なんとも帰命な光景です。直径がわずか〇、一ミリ足らずの細胞の中を歩いて物質を運ぶキネシン。生命でもない単なる物質のキネシンがなぜ人間の足のように歩けるのか。

この様子を見て、タモリさんは「細胞ってすごいですね、ふだん簡単に『おれの命』などと勝手なことを思っています、軽々しく言っちゃだめですね」とコメントしていました。山中教授も「私は科学者ですが、こんな複雑な仕組みを見ると、神がいるのではないかと思ってしまうことがあります」とおっしゃっています。私も同感です。一つの命を生かすために、私の知らないところで、こんなにも多くの細胞が働いてくれていることを知ったら、それを自分の命だなんてとうてい言えません。

自分の命

私たちは、生まれてしばらくして自我（自分が生きているという思い）が芽ばえ、命を自分の命だと思つて生きています。命の真ん中に自分というものがいて、その自分が成長して大人になっていくのだと思つています。でも細胞は日々生まれ変わり、入れ替わつていくのです。継続して生き続けているものなどありません。私の人生の記憶を仕舞い込んでいる脳の神経回路にしても心臓にしても入れ替わつていきます。自我というものなど体のどこにも存在していません。

それなのになぜ自我などという意識が生まれたのでしょうか。「私は自分の人生を生きてきた」などという実体は本当は存在しないということ？

私という幻想を作り出している意識は、現代の科学者にとつての最大の謎になつていきます。科学は一つの真実がわかれば、その何倍もの謎が生まれると言います。つまり真実が明らかになればなるほど、謎が深まっていくということです。科学者は命の本当の姿を未だにつかめていません。私たちはその謎の命を生きているのです。

次回、第四集「果てしなき命の探究」が六月八日（日曜日）の午後九時にNHKで放送されます。興味ある方におすすめです。

おおみねあきら

大峯顕先生

私の敬愛する大峯顕先生の本をあらためて拝読しております。大峯先生は、奈良県吉野の専立寺のご住職で、若いころはドイツの宗教哲学を学ばれ、その後、浄土真宗の教学研究所所長や大阪大学の教授も勤められた方です。なにか堅苦しい肩書ですが、ドイツ観念論を薄い下敷きにしながら、親鸞聖人の教えを、ダイナミックに読み解いておられます。先生のご本は、大半が法話された内容を文字に起こしたもので、とてもわかりやすいです。

「私たちの命は、あみだ様の働きのおかげで生きているのです。親鸞聖人のおっしゃる信心というのは、あみだ様からいただくものです。欲望いっぱいの人たち人間には、どんなことをしたって信心をもつことなどできません。お念仏を称えるということは、そんな自我をなくすということです。なかなか難しいですが、ほんとうの救いはそこにしかありません。現代人は特に、死んだらおしまい現実がすべてだという思いにとらわれ過ぎています。本当は浄土という永遠の世界があるのです」とおっしゃつておられます。私は、ご本を読みながら、自分の自我の心があぶりだされるのを感じております。けどとても心安らぎます。先生は数年前、八十七歳でお浄土に帰っていかれました。

ありがとうございます。これからしばらくは先生のご本を羅針盤に学んでまいります。

【 掲示板のことば 】

あの世

古代、仏教を知らなかった日本人は
死後は暗く汚れた黄泉（よみ）の国へ行くと
思っていました

中世、親鸞さまは

あの世は、命ゆたかな輝く浄土の世界で
あることを発見されました。

私たちのいのちは、すべて浄土へ帰ってまいります。